

22nd International Symposium on ALS/MND



狩野 修

東邦大学医学部内科学講座神経内科学分野 (大森)

2011年11月27日から12月2日の6日間にわたって、MND (Motor Neuron Disease; 運動ニューロン病) 協会および国際神経疾患学会 ALS/MND 協会の主催による、第22回 ALS/MND 国際シンポジウムがオーストラリアのシドニーにて開催された。

ちなみに ALS (amyotrophic lateral sclerosis; 筋萎縮性側索硬化症) とは上位と下位の運動ニューロンが選択的に障害される運動ニューロンの代表的神経変性疾患であり、通常生存期間が約3年と非常に進行の早い病気である。日本ではそれほどなじみがないが、アメリカではニューヨーク・ヤンキースの看板選手で野球殿堂入りしたルー・ゲーリッグ (1925年から14年間にわたり、当時の世界記録となる2130試合連続出場を記録)、イギリスでは理論物理学者のスティーブン・ホーキング博士、中国では毛沢東が罹患した病気として注目度が高い。ALSは運動ニューロンが選択的に障害されるという特徴から、この疾患の原因が解明され治療法がみつければ、他の多くの神経変性疾患にも応用できるのではと期待されている。

今回の学会には私の医局からは岩崎教授、池田先生、吉井先生も参加し、さらに本学卒業生でコロンビア大学神経内科の教授でおられる三本 博先生、北里大学神経内科の前教授の齋藤豊和先生もご参加された。特に三本先生、池田先生、吉井先生の3名は今回講演者として招聘された。特別講演は全25演題 (日本人は6演題) で、“ALSのToho University”として世界中の研究者にアピールすることができたと感激した。一方私はというと、ポスター発表にとどまり非常にさみしい学会になってしまった。アメリカ留学から帰国して半年足らずで満足なデータが得られていなかったとはいえ、次年度は必ず壇上に立てるように奮起せねばと心に誓った。



左から、池田先生、三本教授 (コロンビア大学)、Appel 教授、祖父江教授 (名古屋大学)、岩崎教授そして筆者

学会では主に基礎研究のセッションを中心に回り、積極的に質問するよう心掛けた。以前は質問する際、聞き逃しただけなのでは? などと考え躊躇してしまうことが多かったが、最近はずうずうしく発言するようになっている。主要な論文は読んでいたので、知識・考えでは負けていないはずと自らに暗示をかけている。

学会では、ヒューストン留学中のボスであった Stanley Appel 教授やラボの仲間と再会することもできた。帰国後も共同研究が続いているが私の進捗の遅れに関して、厳しい指摘をされてしまった。常に目をかけてくれているという感謝の気持ちと、日本にいても油断ができないと思われた瞬間でもあった。またこれまで Appel 教授や岩崎教授に紹介していただいた多くのトップリサーチャーとの再会も大いに刺激になった。年に数回のラボミーティングに

Nature, Science などに載るビックネームを招待し、自分の研究に関して朝から深夜までディスカッションをしてきたのでお互いの研究内容から性格、プライベートに至るまで理解している。“もうアクセプトされたのか?”, “よく Appel ラボから日本に生きて帰れたな~” などと冷やかされて苦笑いしてしまうことも多々あったが、こうした論文を投稿する際の強力な recommend reviewer がいるのは貴重な財産であり、Appel 教授、岩崎教授には本当に感謝している。

この学会は医師、研究者のみならず医療関係者や患者も自由に参加できるというのが一つの特徴である。介護者とともに参加されている患者も多数いて、車椅子に乗った患者が発表者に質問することもしばしばみられるオープンな学会である。ALS という難病に苦しむ患者のためにも 1 日でも早くいい結果を報告したいと強く感じた。

学会の最終日には齋藤豊和先生夫妻と池田先生、私の 4 人でブルーマウンテンズ国立公園へ行った。齋藤先生は本学卒業後、北里大学神経内科で研鑽を積み教授になられたわれわれの大先輩であるが、北里大学に行かれてからも常に東邦の神経内科を気にされていたことなどを聞きとても感動した。本学創設者のご令孫でオタゴ大学神経内科教授の額田 均先生など本学からは多数の著名な神経内科医が輩出されており、私もこうした諸先輩方に少しでも近づけるよう努力したいと思った。

最後になりましたが、われわれの ALS 研究の基礎を築き、臨床から基礎研究に至るまでご指導して下さる岩崎泰雄教授、いつも温かく実験のサポートして下さる病理学講座の石井壽晴教授、石川由起雄先生、臨床検査医学研究室の盛田俊介教授に心より感謝いたします。